

昭和62年12月25日

第45号

尾瀬の自然



第45号 67-12

発行 昭和62年12月25日

(原題 初代環境庁長官 大石 武一氏)



キヌガサソウ(松田美代子)

尾瀬の自然を守る会



[写真説明] 広がった登山道を計測する会員。
広いところは、15mもある。

至仏山が危ない！

—至仏山研究観察会報告—

九月二十六日（土）から二十七日（日）にかけて、至仏山の登山道を見る観察会を行った。上毛高原駅に集合し、旅館のマイクロバスに乗り込み、湯の小屋から坤六峰を越えて戸倉にてた。

トチやヤマウルシは、すでに色づいて全山紅葉の幕開けを告げていた。

天候は曇り、夜になって雨になった。宿は戸倉尾瀬高原ホテル。参加者（岸好人、内海廣重、酒井崇浩、竹田誠二

弘）は、以上一五名。伊藤和義、鈴木隆、飯塚忠志、生方欣司、伊藤あつ子、町田恵子、奥平貞昌、飯野政美、三浦義一、平井敬治、青木安

弘）は、以上一五名。

翌日、至仏山へ。ブナの巨木に紅くツタウルシが這う山の鼻への道。がれ場の登山道を辿って山頂へ。タカネバラの赤い実が印象的だ。天候はきれいに晴れていた。

至仏山頂から西側を見下ろすと、流れるガスの合間に問題の奈良俣ダム工事現場が、

山稜がパクリと口を開けたように、白い傷口を見せていた。山を削り、その岩石をダムに積上げているのである。双眼鏡で眺めると、動き回るダンブカーが蟻のように見える。あそこでは、一六五トンのパワーショベルがうなりをあげているのだ。

至仏山の危機については、すでに一九八五年の「提言」において訴え、本誌第三六号でも、須藤志成幸氏が論じてゐるが、今回はそれらを再確認する観察会となつた。

（以下は、その報告記）

坤六峰を経て津奈木に通じる県道、水上～片品線は、アルブス的山容をもつ谷川連峰、原生林の多い大自然、溪流の

清らかな瀬音がこだまする中で、早い紅葉に染められ極彩色の自然美に囲まれていました。巨大な奈良俣ダムの建設が目の前に現われると、ロマンの世界から現実の世界へ呼びもどされました。流れの少ないところに大きなダム、どのようにして水を溜めるのか不思議です。今問題になつてゐる尾瀬分水の受け皿とも云われています。道路はほとんど舗装されていて津奈木側の

一部分が現在工事中のあります。エンジンの音を響かせてマイカーが走り抜けるのは時間の問題です。尾瀬へのオーバーニュースを防ぎ観光ルート化を防ぐために車規制の必要がある道であります。

至仏山

こうした年々の裸地化の進行に対して、今まで尾瀬ヶ原の保護に重点がおかれて、人々の目があまり至仏山へ向けれなかつたせいもあり、破壊としての認識が薄かつたのではないだろうか。この点で至仏山の自然に関する知識と保護について知らせることが不十分であったと思われます。

小至仏山東面の雪田群落のあるお花畑の踏み付けによる荒廃は、泥炭が流出して裸地が広がります。現在、雪田地帯の登山道は閉鎖されていますが、雪田の中央部分に木道が廃れたままあり、そのため山頂や他の登山道から現在でも通行できる道と思われています。廃道にしたところの不用となつた木道の早い撤去が必要であります。

なお、小至仏山頂附近、小至仏山から至仏山頂への道について、登山道を一本にするために道を明確にし、迷い道は立入禁止を行うことが当面の緊急な措置であると思われます。

至仏山の危機については、すでに一九八五年の「提言」において訴え、本誌第三六号でも、須藤志成幸氏が論じてゐるが、今回はそれらを再確認する観察会となつた。

（以下は、その報告記）

山の鼻からの登りは急坂で土が流出し、深い溝ができる、露出している岩石はすべりやすいため、歩きにくく危険であります。そのために安全を求めて草付や林間の下に登山道が広がりつつあります。

上毛高原駅からの道

水上温泉から湯の小屋温泉、

昭和62年12月25日

このままでは、裸地は拡大する一方で、そこでの自然の再生能力は失なわれるばかりであります。荒廃をこれ以上拡大させないために、侵食の激しい登山道の廃止、登山者を適切に誘導するための道標の設置やロープによる登山道の確保が当面必要な課題であります。特に、荒廃のはげしい山の鼻から至仏山頂への登山道は、裸地の拡大を押さえ破壊から守り、入山者の安全を守るために（現地には入山者に遭難の危険を訴える立札がある。「写真」）廃止が必要であることを痛感しました。

他方、今日の登山におけるファミリー登山や集団登山についても、これを検討する時期に来ているのではないだろう。

至仏山午後の登山に 急変し濃霧等により 至仏山は午後になる

〔写真説明〕山の鼻にある立札

(飯塚記)



〔写真説明〕奥鬼怒トンネル工事現場（群馬県側）

奥鬼怒スーザー林道工事現場を踏査して

至仏山は、森林限界が底く眺めのよい山であります。稜線より東、尾瀬ヶ原側はならかな斜面であり、西側は谷川岳に面して急峻で上越国境からの風をまともに受けて、厳しい地形になっています。

この日の至仏山は、宿の雨も嘘のような天候に恵まれ、澄み渡った大空は風吹くままに漂いたいような青き秋の空でした。山頂からの眺めは素晴らしい。草紅葉にかがやく尾瀬ヶ原が、尾瀬をとりまく山々が、紅葉と緑の触れ合いが美しく水彩画のようでした。山頂附近のハイマツは、サラサドウダンの紅葉が交じり、ひと色異なるササの緑と共に山上の樂園を奏でていました。

静かな紅葉の山に冷たい雨がそぼぶる、十月二十四日、奥鬼怒スーザー林道（四六、七キロ）の群馬側（九、三キロ）の工事現場における現地踏査を群馬県自然保護団体連絡協議会（高橋義男代表）が森林開発公団前橋建設事務所の金附所長らの案内で行いました。

参加者は、尾瀬の自然を守る会から内海事務局長、波戸場、梅山、関口の各指導員、今井勝俊、野村両群大教授、大峰の自然を守る会の村上代表、利根、沼田の自然を愛する会の生方顧問外二名、さらには、藤原信宇都宮大学教授、私と計十三名であります。工事は、県側の林道部分のうち、

主に県境の奥鬼怒トンネル（仮称）の掘削であります。トンネルの長さは約一、三キロ、その内群馬側は約七五〇メートル、すでに三〇〇メートルまで掘り進められていました。何故か、トンネル幅は三、五メートルであるべき幅が四、五メートルで掘られていました。公団の説明によると、側溝を作るので車道の幅は三、五メートルの環境庁との留意事項を守っているとのことです。何か心配の火種が残りました。何うな気がします。工事は今でも一日三メートルの割合で順調に進行しているそうですね。

このトンネル掘削の土は、坑口近くの沢筋に土捨て場が設けられ、そこに運びだされしていました。土砂流出防止の措置が不十分で、谷にむかって土砂流出が二次災害を呼ぶ恐れがあります。

そうして坑口附近は、亜高山帯特有のオオシラビソ、コメツガ等の針葉樹が多く、開削による立ち枯れなど影響が出るのではないか。それに伴い地盤崩壊が心配。又、トンネル入口近くの水路やコンクリート製の側溝に野生動物が

落ちないような保護対策が必要あります。工事に使用されている重機の油漏れや、廃油の処理対策などの確立も必要あります。

トンネル掘削現場では「危険」との理由で立ち入ることが出来なかつたので、先端の切羽のところの工法が見たかつたのに残念でした。

開削工事が終つている林道は、岩肌がむき出しのため落石や崩壊が心配されるのり面や道路下の沢に伐採された樹木が乱雑に散らばっているところも見られます。又、よう壁には自然石又は自然石に模したブロックを使用することになつていますが、今までの林道の改良工事部分については、自然石に模した粗面ブロック（ブロックの面が荒いの）で自然石のようによけがつきやすい）が使用されていますが、五十八年以来、いまだにその部分は緑に復元されません。

そして坑口附近の開削工事部分は、コンクリートの吹きつけが行なわれおり、自然環境の保全、安全性の面からも問題がありそうです。

土捨て場や、よう壁、路肩等の綠化について、外来種の牧草や生育の早いエニシダなど附近の植生に関係なく植えられました。ハノキ、ヤシバ、イタドリ、ヨモギなど、当該地域に生育する植物と同種の植物に変つてきている点は評価できますが、自然の植生を守るためにきめ細かい配慮がさらに必要あります。

路肩のガードレールについて、環境庁の指示とかで、裏側がコゲ茶色に塗られていて、何となく落着いた感じがしました。

今回の調査結果については、尾瀬をとりまく自然保護シンポジウムの討論結果や、栎木の自然保護団体連絡協議会との協議を行ない判明した問題点を踏まえて、森林開発公団に申入れとして提出することにしていました。

県が勢揃いしたことになり、画期的でその意義は極めて高いた。当会からは、内海事務局長以下十一名が参加した。参加数は数百十数名。（以下は、その概略レポートである。）

はじめに、主催県の栃木県自然保護団体連絡協議会の藤原信氏が挨拶に立ち、先に開かれた国会で可決成立した「リゾート法案」と自然保護運動について、その内容とねいがあるようです。

この法律は「良好な自然条件を有する土地を含む相当規

第五回尾瀬周辺自然保護シンポジウム

奥鬼怒スバーリ道の建設が中止されなければ、奥鬼怒の自然は無残の様相を呈するだろう。人間の黒い爪跡が山稜に食い込むとき、それは明らかな犯罪である。

尾瀬の自然を守ることを主要な課題として出発した本シンポジウムは、五回を数え十一月二十九日、宇都宮大学農学部で開催された。

今回は、初めて新潟のメンバーが原発問題、信濃川分水問題を掲げて参加した。

このことは、尾瀬を巡る四県が勢揃いしたことになり、画期的でその意義は極めて高い。当会からは、内海事務局長以下十一名が参加した。参加数は数百十数名。（以下は、その概略レポートである。）

はじめて、主催県の栃木県自然保護団体連絡協議会の藤原信氏が挨拶に立ち、先に開かれた国会で可決成立した「リゾート法案」と自然保護運動について、その内容とねいがあるようです。

この法律は「良好な自然条件を有する土地を含む相当規

模の地域について、国民が余暇を利用して行うスポーツ、レクリエーション、教養文化活動等に資するための総合的な機能の整備を民間事業者の能力の活用に重点を置きつつ促進する」ことを第一条で目的として唱つてゐる。また、第四条の基本構想の指針の中で「自然環境の保全との調和」を定めている。だが、すでに全国四六道府県、七五地域が開発の対象とされている。具体的には北海道のシムカップ村のリゾート計画（一九面のテニスコート、国有林を伐採し蔵王なみの規模のスキー場建設、五二〇ベッドのホテル、等）や栃木県の塩原町と藤原町にまたがる尾鹿岳の国有林を含む森林を伐採しスキー場やゴルフ場をつくる計画等があります。この法律の本当のねらいは四全総が森林資源にも食指を伸ばし始めたということであり、具体化される段階で乱開発となれば全国の森林は荒れ放題となる。

奥鬼怒スバーリ道の現状と問題点について、栃木県側

のルートを栃木県労働者山岳連盟の高村文夫氏がこれまで7回調査に入つており、その記録をスライドで説明した。

林道のできる前後で鬼怒沼にいたる沢の状況が一変してしまった。昔からの川沿いの登山道は落石があつたが整備されていない。八丁ノ湯ではも工事による土砂で埋まってしまった。昔からの川沿いの登山道は落石があつたが整備されない。八丁ノ湯では二〇・三〇坪の宿泊施設が三棟新築されている。

統いて、群馬県側のルート及び尾瀬周辺の道路開発について、尾瀬の自然を守る会群馬支部長の飯塚氏が発表した。

その中で、特に今年の現地調査で明らかになったことでは、昨年現地に入ったときに道路の両側に柱状節の岩肌がむき出しになつていて壁面について下部はブロック積上げ、上部はコンクリートの吹き付けがしてあつた。これは周囲の自然の景観の中では全く奇異なものであつて、自然環境の保全という面ではおかしいのではないか。また、県境のトンネル工事に着工しているが、その土砂はすべて群馬県側に持ち出しており、七カ所

昭和62年12月25日

るが、それもあふれて谷側に落石を起こしかねない状況である。

水上温泉からの湯ノ小屋線の全面舗装によって尾瀬は入り易くなりつつある。新聞報道によると、今まで尾瀬の表玄関は群馬だと自負し、広く認められてきたが、今年の入山者の動向を見ると群馬県側から入った人が三九八、〇〇〇人であるのに対し、福島県側からの入山者は四四八、〇〇〇人となってしまったという。

尾瀬の表玄関を群馬に取りもどしたいとの意図が地元の片山となってしまったといふ。尾瀬の表玄関を群馬に取りもどしたいとの意図が地元の片山となってしまったといふ。

品村等にはあるのではないか。

福島県自然保護協会会長の

星一彰氏から「尾瀬の水資源

問題」についての発表があつた。

関東地方の異常渴水からこ

の問題が再び表面化している

が、東北地方では水は余って

はいらない。今年は福島市では

阿武隈川の水位が下がって取

水できず、ポンプアップした。

尾瀬沼集水域面積は八三平

方KMで、そのうち群馬六三

・二四平方KM、福島一八・

七四平方KM、新潟一・八二

平方KMである。取水トンネ

ルは、入口で高さ一・六M、

幅一・四Mであった。取水

屋の表示を見ると、毎秒二・

七五トンを落す能力があり、

貯水量五一九万立方Mとあり、

これは尾瀬沼の

面積一・七平方

KMに水深を三

Mとすると計算

の合う量である、

とのことであつた。

さらに、「至仏

山の破壊の現状」

について当会の

坂井崇浩氏が発

表した。

至仏山の写真

東京の新潟の自然保護団体の人

たちがそれを報告があり、

その後、参加者からの質問も多

く出されるなどの盛り上がりを

みせた。

また、日本野鳥の会県支部副支部長の高松健比古さんより

にオブザーバーとして参加した

このほか、群馬や福島、それ

の宇都宮大学に約百人を募めて開かれた。

この中で栃木県自然保護団体

連絡協議会代表の麻原信子が開

いた。

このほか、群馬や福島、それ

の宇都宮大学に約百人を募めて開かれた。

水彩写生旅行

(三) 大下 藤次郎
(日本水彩画家)



今は請買ひの客で宿屋は一ツバイだ、然し前からソウ云つて有つたので所謂「上の家」にとまる事が出来た、こゝは宿屋とは離れてゐるが大きな家で、表の方には下駄の臺が澤三積み上げてある、一行四人は此家を買切りの姿、暫らく休息してスケッケに出かける。(直)宿の混雜はコフチの幸

歩行はしないが、長時間流車や馬車で可なり疲れた、定さんはモー豆が出来た『水道町』から『目白』迄二十丁程で、この有様では『屋瀬』へ着くころには一度分のお茶位ひはあるだらう。(鶴)暮れ行く『沼田』の町、何となく詩的な感がある。『沼田』は昔真田氏の居城であつた、今は其の跡もないが……限りなくモクモクと湧く夕雲が暗く空を覆ひ、連々と起伏する山のみ僅に夕日に照つて火の様な色をなす邊、血の如き真田氏の熱烈が見える様だ。

夜は繪葉書やら荷物の整理やらで忙がしい。(直)

『沼田』の町は一寸縫になる町端れから突むら立つ『赤城』の山を寫した、何處を見ても繪になる、二三日は滞留してもよい處である。

午前六時半宿を立つ。流石『沼田』は義理の町である、家の構造は全く都附近——否『濱川』とですら既に達つて居る、棟の高い二階造り、僕等の目には珍らしく感じた。(直)朝は五時出發と宵に姉さんに頼んで置たのであるが、五時頃往つて見ても、まだ本家では戸が閉つ

七月十三日 半晴

■藤田英忠(豊栄市) 私はこの講座にて、人間の良心みたいなところで尾瀬を守らなければ、という思いをもつた。尾瀬で最も弱いものは、湿原とその特殊な環境と気候に育つ草花である。私達はいつも人間を中心と物事を考える。自然保護運動だってしかりだ。例えば、純粹に自然を守る。という思想の中に後世の人間に残さねばならない。この美しい自然を残さねば、という思想がある。これは一見その保護運動の基盤となるようと思えるのだが、私はそうではない。この自然を後世の人間に伝えるものではなく、湿原と草花の子孫とその形成に関与する環境を彼等の為に残さねばならぬ、というものである。

■平井啓子(高崎市) 雨の降るアヤメ平を歩いたとき、目に映るただれた大地がなんてかなしかつたことか、カッパのフードで顔を隠して、グゥと奥の方からこみあげてくるのをおさえこむようにしながら歩きました。そのときがどんどんあふれてきて泣きの涙は、ただかなしさだけでなく、人間の罪深さ、人間に

対する怒りでした。ある種の興奮状態で両手の拳骨があふれ、頭の中は思いがあふれてパニックになつてしましました。

■関谷路男(高崎市) 沼には十数年間訪れませんでした。自家に帰つて昔の写真と見比べると大きく変つていました。標高一、四〇〇～一二、二〇〇Mの山岳地域である尾瀬が一般観光地化されている様子がはつきりわかるほどで、入山する人達の服装や軽装化は困惑したしだいで、高山植物の写真を見る人々のモラルの低さところがまわす湿原に入る人など旅の恥かき捨てが見え見えで残念です。又、軽装化された人が歩きやすいように登山道がほとんど木道に変つていました。

■岡田 実(太田市) 自然を守る会の提言は賛成であるが、実現には相当時間を要するものもあるようだ。政治的に働きかけ、法制化しなければ守れないようだ。なかでも(5)の尾瀬登山口に保護センターを設置する案は、とてもよいと思う。入山する前に人々に啓蒙したり、指導員の養成と増員をはかるなど、今早急にやるべきだと思う。

てゐる、トン／＼叩いて女共を起し、顔を洗ふや否飯を怠がせて、漸く六時過出發した。
銘々の裝こそ大へンなものである。洋服に脚附、新しい草鞋がけのふ捕ひだが、その所謂洋服なる
ものが大變だ。中學三年時代の制服もある、紹か何かのイヤに古ボケたのもある、鼠色の麻の如何

にも窮屈さうなものある、かく申菜は、上衣こそやゝ物になつて居るが、ツボンと来ては東京市中を歩行けた代物ではない。

人夫がないため荷物は自分で負ふてゆくので、寫生用の七ツ道具のはかに、毛布や防寒具やら、食料やら、日用品やら、數の多いのは一人で六七個もある、犬の吠へるのも無理のない體裁である(圖)

桑畠の間を行く事半里許り、見晴らし好き所を擇らんで腰を下ろす、下は谷——『片品川』は向ふの山の間から出て、此の谷を走つて遠く西の方へ去り、『上久屋村』が川に沿ひて點々と見ゆる、四方

は矢張り山である。(直)

『落日』の曲を附せばにかく『一花が重い』原が歌し、何と云ふかは日本古文書の所載の如きによれば、『落日』の曲を附せばにかく『一花が重い』原が歌し、何と云ふかは日本古文書の所載の如きによれば、

久屋で休の聲がかかる時は、恰も倒れるやうに皆々草の上に座した。(間)
『高平村』迄一里、路至つて平凡であるが、それからは今日の難所『栗生峠』にかかるのである、『栗

生岬』は其の名の現はす如く栗が素的にある、栗時分はサゾ好い事だらう、ソレは餘計な心配だが何しろ肩が痛い、足が痛い、重い荷物はグン／＼脳天から押へ付ける、汗は出る、日は照る、其の難澁さ加減、後から來た郵便屋サンはモウずつと先きに行く。實に苦しい、他から見られたるもので無いだらうが、本人は一生懸命、水を飲むだり樹蔭で休んだりする事三四回、十二時にやつと岬に達した。

十二時ときけば腹がへる、蒸腹モ一時だがさつき飲んだ水はモウ汗となつて出てしまつた、峠の上には一滴だつて有りやしない、先生の主張で一息に『大原新町』迄下りる事にはしたが、サテ歩き

出すところある事甚しい。『新町』では所謂「うむごん」を喰べた、菓子代りに出した柿の砂糖漬は甘^{あま}の味がした、先生も生れて始めてだと云ふ、頗る珍味だ。(直)

岬は別に大した難所ではないが、荷があるので質に苦しかつた。『大原新町』の茶屋では頻りなしにキユースに湯をつぐので、蓋をする間がなかつた。名物うむどんの膳について來た海苔の色には質に驚いた。(感)

入会のおすすめ

「尾瀬の自然を守る会」は日本における自然保護運動の発祥地・原点である尾瀬において、自然保護を考え、学び、行動する“市民の会”です。

昭和四十六年八月尾瀬を通る
国際観光ルート沼田—田島線
建設反対運動の祭に発足し、

その後幾多の困難を経ながら、会員の努力によつて運動が続けられました。

けられております
尾瀬を愛する皆さん、小さ
な力でも合せれば、一粒の雨

滴が大河になるように大きな力となります。どうぞ、この運動にご参加下さい。そして、

日本はこの豊かな自然を守り、いつまでても心豊かな人間生活を送ろう

ではありますか。
会の活動。会報「尾瀬の自
然」を発行。自然観察会

○自然保護指導員養成講座
○その他、自然保護に関する

調査研究 講演会など

学生会員（高・大学生）一、
〇〇〇円を会の会計へ振替で、

必要事項（職業、電話連絡先、新規・継続の別）を記入の上お納め下さい。

会の会計・松田美代子(〒260
千葉市作草部八六四一五〇三
電話〇四七二(51)九五八七

振替番号・東京6-138023
尾瀬の自然を守る会

■富沢洋（前橋市） 北の日本海を目指して只見川に流れ込む尾瀬の水。確かにあの豊富な水は、水不足の首都圏では欲しいものであろう。しかし、北に向って流れるべき水を勝手に南に向きを変えてしまうということを許すことは私には出来ない。

■渡丸令子（高崎市） わたしが、この夏の講座に参加して、まず一番率直に考えたことは、尾瀬の荒廃は、知識の不足によっておこっているということです。ある夫婦が、わたしたちは出会いました。尾瀬の高山植物を観るために夫婦は喜んで、湿原に足をついて写真を撮りました。また、若い女の子のグループは、すべりやすいパンプスを履いていました。ビジターセンターが尾瀬沼の近くにありますから、尾瀬の現状と尾瀬の湿原をどう守れば良いのかの正しい認識をもつと適切に、誰にでも教えなくてはならないと考えます。

尾瀬の自然を守る会
拠点番号 東京 100020

周易口義卷之三

い高層湿原、青くそびえる燧ヶ岳、変わり果てた姿のアヤメ平、そのどれもが記憶の中にしっかりと刻みこまれた思いです。けれどももし私が何の説明もなしに、何の知識もなしにいきなり尾瀬に足を踏み入れていたらどうだったでしょうか。美しい尾瀬は発見できたと思います。しかし、"愛すべき尾瀬は守られなければならぬ"という意識はおそらくこれほど心の中に焼きつきはしなかったのではないかと思います。

■鬼丸和幸（仙台市）
自然
というのは前代から受けつがれたものだから、子孫へは利用の仕方を考え、必ず利するのも難しいといわれるが、子をつけて返せとよく言われる。尾瀬は今は現状さえ保存

されなければならないといふべき尾瀬は守られなければならぬ"という意識はおそらくこれほど心の中に焼きつきはしなかったのではないかと思います。

■鈴木 隆（相模原市）
小屋や木道の問題もそもそも根底には来る人が多すぎるといふことがある。入山規制には色々な方法があると思うが、私は一日に何人しか尾瀬に入山できないと決めてしまって、入山したい人は尾瀬総合保護課

センターにあらかじめ予約しなければいけないようにならうと思います。そうすればほんとうに尾瀬に来たい人が来るようになると思う。そうなれば小屋の問題や木道の問題もおのずから改善されるのではないかでしょう。

■新田和宏（横浜市）
尾瀬
は絶好の環境教育のフィールドだ。逆説的に聞こえるかも知れないけれど、幸か不幸か、尾瀬は"負の遺産"といふべきアヤメ平をもっている。ワイヤーゼッカ（西独大統領）の言葉通り、「過去に目を閉じる者は現在に盲目になる」。アヤメ平の悲惨な光景に目を逸してはいけない。

"アヤメダイラ"は、"ビロシマ"や"ミナマタ"と同じように後世人の教訓の地だ。■兼坂武志（宇都宮市）
入山制限について色々の意見が出でました。私はあまり嬉しいとは思わなかった。私はとても難しいといわれるが、それをつけて返せとよく言われる。尾瀬は今は現状さえ保存され、首都圏の生活用水としてでも、ことあるごとに取りざたされ、数奇な運命を辿ってきたことは、あまり知られていないのではないか。私も二年前、「尾瀬」「山小屋三代の記」を読むまでは知らないかった事であり、まったく認識不足であったと言わざるを得ない。今回の講座に参加するにあたり読みかえし、「守る会」の名が出てくる場面で、電力・取水問題の背景と本会の果たしてきた役割を再認識することにもなった。

■三浦義一（泉市）
尾瀬を歩いてみて、今まで時間は、いずれも午後三時半分。係は三時前に。私はとても難しいといわれるが、それをつけて返せとよく言われる。尾瀬は今は現状さえ保存され、首都圏の生活用水としてでも、ことあるごとに取りざたされ、数奇な運命を辿ってきたことは、あまり知られていないのではないか。私も二年前、「尾瀬」「山小屋三代の記」を読むまでは知らないかった事であり、まったく認識不足であったと言わざるを得ない。今回の講座に参加するにあたり読みかえし、「守る会」の名が出てくる場面で、電力・取水問題の背景と本会の果たしてきた役割を再認識することにもなった。

○
◎ 総会・観察会
六三年二月二十八日（日）午前十時三〇分集合
明治神宮拝殿前 内園見学
午後一時から総会（電力館）
役員改選・他

◎ 例会案内
六三年一月九日（土）新年会を兼ねる。
(係・青木、鈴木)
六三年二月六日（土）(係・狩谷、新田)
六三年三月五日（土）(係・牛木、水沼)

○
◎ 軍司蜂写真展
「尾瀬への招待」
昭和63年3月30日～4月4日

前橋市文化会館において

年	月	日	会場
1年分会費2,000円を添えて申し込みます。（学生1,000円）			
名 前（ふりがな）			男 女
現住所			自宅電話
〒 () 年 月 日			電 話
勤務先			
㊟ この入会申込書は、前頁の会計あてお送り下さい。			

事務局	編集	発行	発行者	発行日	尾瀬の自然を守る会
03-425-4481内43	東京農業大学第一高等學校生物教室内	竹田・上野	青木・水沼	昭和62年12月25日	第45号
43	東京農業大学第一高等	区桜3-33-1	岸 好人		
43	東京農業大学第一高等	〒156			
43	東京農業大学第一高等	東京都世田谷			